

台湾「SARS 教訓に」

駐日代表、迅速・周到に先手



謝長廷代表

足元で新たな感染者の確認がゼロの日もある台湾は、新型コロナウイルススへの対応が世界から注目される。台湾の元行政院長（首相）で、駐日大使に相当する台北駐日経済文化代表処の謝長廷代表は日本経済新聞に対

し、「2003年の重症急性呼吸器症候群（SARS）が痛ましい教訓になった」と指摘した。

新型コロナウイルスの情報分析をめぐり、謝氏は「我々の中国の文化に対する理解は深い。中国発の情報をもそのまま信じず、裏に何かあると考える」と語った。19年12月末、武漢で新たな肺炎が出たとの情報を世界保健機関（WHO）と中国当局に

メールで送り「当初から『人から人への感染』の可能性を排除せず、武漢からの航空便への立ち入り検査を始めた」とした。

1971年の中国の国連加盟に伴い、台湾は国連やWHOに加盟できない。謝氏は「ウイルスの性質がなかなか分からないなど不利がある」と指摘。「（多くの死者が出た）03年のSARSは痛ましい教訓だ。WHOか

ら情報や助けが来ない前提で、迅速、周到に先手を打つ」として、防疫の指揮体系の強化などに取り組んだと説明した。

中国の反対で、WHO年次総会へのオブザーバー参加もできない現状に閉しては「感染症予防で一つの空白ができれば世界全体を危うくする。健康と政治は関係がない」と訴えた。トランプ米大統領がWHOへの資金拠出を当面停止すると表明したことについては「他の政策にはコメントしない」と述べるにとどめた。（大越匡洋）